懸壅垂披裂症ノ遺傳的意義ニ關スル一考察

Dr. Hikohati Simura: Eine Betrachtung über die
erbbiologische bedeutung der Uvula bifida.

名古屋帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室(主任 阿久根睦教授)

醫學士 志 村 彦 八
シ ムラ ヒコ ハチ

第一章 緒 言

兎唇及ピロ蓋披裂ノ遺傳ニ關シテハ古クヨリ知ラレ、既ニ 1757 年 Jak. Trew ハ其家系ヲ報告シ、其遺傳性ヲ指摘セリ。其後外國ニ於テハ多數ノ學者ニヨリ研究セラレタルモ未ダ其遺傳型式、遺傳因子等ニ就キ確タル發表無シ。本邦ニ於テモ亦二三ノ人ニヨリ報告アルモ兎唇又

ハ口蓋披裂ノミニ就テ研究サレ、其間兩者ノ相互關係及ビ懸壅垂披裂トノ關係ニ關シテハ發表無シ。依リテ余ハ兩者ノ相互關係及ビ所謂 Mikroform トシテノ懸壅垂披裂ニ就テ二三家系ヲ得タルヲ以テ報告シ、聊カ私見ヲ述ベント欲ス。

第二章 實 驗 例

第一節 金〇家系

第1例 金〇一〇、12歳、♀。

本籍地。佐賀縣西松浦郡山代町大字東分8185。

現住所。名古屋市南區豐本通北2丁目。

Proband ハ生來口蓋披裂アリテ幼時ヨリ嚥下障礙アリ。風邪ニ罹リ易ク且ツ屢ニ咽頭炎ヲ患ヒタリ。言葉ヲ發セン頃ヨリ言語障礙アリ。言語障礙ヲ主訴トシテ來タル。

局所所見。鼓膜ハ少シク内陷シ滲濁アリ。鼻腔粘膜ハ發赤シ。鼻中隔ハ中央ニ於テ口蓋ヨリ離隔シ、咽頭後壁ヲ視見シ得。咽頭粘膜ハ一般

ニ發赤シ。口蓋ハ軟口蓋、懸壅垂共ニ正中線ニ於テ披裂シ、硬口蓋ノ一部モ亦披裂セリ。他ニ畸形無シ。手術施行。全治セリ。

第2例 兄ハ懸壅垂第二度ノ披裂アリ。

第3例 懸壅垂第三度ノ披裂アリ。鼻咽頭粘膜少シク發赤ス。

第4例 兎唇及ピロ蓋披裂存センモ幼時ニ死亡セリ。

第5例 第二度ノ懸壅垂披裂存シ、又口蓋扁桃腺肥大シ頸部淋巴腺腫脹ス。

第6例 49歳、懸壅垂第二度ノ披裂アリ。他ニ畸形無シ。

金子家系圖

第二節 松○家系

第1例 松○キ○子。1年6ヶ月。♀。

本籍地。愛知縣八名郡船附村字市川。

現住所。名古屋市南區道德新町4丁目3275。

Proband ハ風邪＝罹リ易ク、授乳＝困難ス。

局所所見。兩側鼓膜潤濁ス。鼻腔粘膜ハ發赤シ。粘液下鼻道＝下ル。鼻中隔ハ發赤シ。鼻咽頭腔＝膿汁アリ。口蓋ハ懸壜垂。軟口蓋及ビ硬口蓋ノ一部正中線＝於テ披裂セリ。他ニ畸形ヲ見ズ。

第2例 42歳。♂。懸壜垂第一度ノ披裂アリ。他ニ畸形ヲ見ズ。

松場家系圖

第三節 小○家系

第1例 小○昭○ 8歳。♀。

本籍地。長野縣小縣郡泉田村1番地。

現住所。名古屋市千種區坂下町2丁目20。

Proband ハ言語障礙ヲ主訴トシテ。

名大耳鼻科ニテ手術ヲ施行シ全治ス。

局所所見。右側兔脣縫合セシ瘢痕アリ。

口蓋ハ懸壜垂。軟口蓋及ビ硬口蓋ノ一部正中線＝於テ縫合セシ瘢痕アリ。又右側齒列異常存ス。言語障礙尙ホ存ス。他ニ畸形ヲ見ズ。

第2例 5歳。♀。第二度懸壜垂披裂アリ。

第3例 31歳。♀。第一度懸壜垂披裂アリ。

小泉家系圖

第四節 柴○家系

第1例 柴○博 6歳。♂。

本籍地。名古屋市西區江川町1ノ20。

現住所。同上。

Proband ハ本年3月名大耳鼻科ニテ先天性口蓋披裂ノ診斷ニテ手術ヲ受ケ懸壜垂ノ一部＝披裂アルモ他ハ全ク癒着セリ。言語障礙尙ホ存ス。

第2例 8歳。♂。懸壜垂第二度＝披裂ス。

第3例 ♂。第一度懸壜垂披裂アリ。

第4例 ♂。Proband ノ祖母ニシテ第一度懸壜垂披裂アリ。他ニ畸形無シ。

第5例 ♂。兔脣アリシモ幼時ニ死亡セリ。

第6例 19歳。♂。左側兎脣縫合セシ跡アリ。言語障礙アリテ且ツ難聴ヲ訴フ。中耳炎後遺症アリ。口蓋ハ軟口蓋。懸壜垂。硬口蓋ノ一部

ガ正中線ニ於テ披裂シ。且ツ齒列異常アリ。鼻腔ハ發赤シ膿汁後鼻腔ニ存ス。智能發育惡シ。

第7例 7歳。♀。第一度懸壜垂披裂アリ。

柴田家系圖

第五節 羽○田家系

第1例 羽○田幸○ 7歳。♀。

本籍地。愛知縣幡豆郡三和村西淺井1番地。

現住所。同上。

言語障礙ヲ主訴トシテ來タリ。名大耳鼻科ニテ先天性口蓋披裂ノ診斷ニテ手術ヲ施行シ全治セリ。懸壜垂。軟口蓋及ビ硬口蓋ノ一部披裂アリタリ。

第2例 口蓋披裂アリシガ幼時死亡ス。

第3例 35歳。♀。第三度懸壜垂披裂アリ。

第4例 38歳。♀。第二度懸壜垂披裂アリ。

第5例 11歳。♂。第一度懸壜垂披裂アリ。

第6例 5歳。♀。第二度懸壜垂披裂アリ。

第7例 10歳。♂。第二度懸壜垂披裂アリ。

第8例 5歳。♀。第二度懸壜垂披裂アリ。

又兩側慢性中耳炎存ス。

羽佐田家系圖

第9例 3歳。♂。第四度懸壜垂披裂アリ。

第10例 兎脣及ビロ蓋披裂アリ。幼時死亡ス。

第11例 14歳。♀。第一度懸壜垂披裂アリ。

第12例 3歳。♀。第一度懸壜垂披裂アリ。

第三章 統計的觀察

余ハ年齢 17 歳ヨリ 19 歳マデノ男子ニシテ健康ナルモノ 3567 名ニ就キ検査ヲ行ヒタリ。但シ畸形ノ高度ナル者及ビ智能薄弱ナルモノハ仕事ノ性質上採用サレザルヲ以テロ蓋披裂等ノ存センモノハ勿論除外サル。

次表ノ如ク懸壜垂披裂第一度ノモノ多數アリテ諸家ノ統計ト大體一致セル結果トナレリ。但シ原田氏ノアイヌ人 19.9%。ケルネルノ白人 12.2%ト比較スルトキ、其間何等カノ民族の差異アラシカト思惟ス。永井ハ其發現率ハ年齢ト共ニ

統計表

程 度	患者數	%	總人員
第一度	191	5.4	
第二度	92	2.6	
第三度	24	0.7	
第四度	6	0.2	
兎 脣	4	0.1	
計	317 名	9.0	3567 名

減少スルノ事實ヲ確メタルガ 從ツテ統計ノ比較ニハ年齢の關係モ亦考慮サル。從ツテ遺傳學ノ考察ニ一定ノ條件ガ考慮サル可キモノナル。

第四章 遺傳學的考察

兎脣及ビロ蓋披裂ノ家族的ニ發生シ、其遺傳性ヲ指摘セルハ既ニ 1757 年 T. Trew ノ記載セル所ニシテ、彼ノ示セル家系ニ於テハ四世代ニ亘リテ兎脣及ビロ蓋披裂ノ患者ヲ觀察セリ。其他兎脣及ビロ蓋披裂ノ家族發生ヲ見タル例ハ多クアリテ、Lucas (1795)ハ同胞間ニ見、Meckel (1812), Nicati (1822), Steinhausen (1836), Houston (1843), Canard (1845), Bennert (1846), Roux (1848) 等ハ孰レモ其遺傳性ヲ指摘セリ。殊ニ Demarquay (1845)ハ所謂 Spaltbildung ハ遺傳因子ニヨツテ生ズルモノナル事ヲ其示セル三家系ニ就キ強調セリ。Murray (1860) モ亦斯カル畸形ト指癒合症ノ合併セル家系ヲ擧ゲタリ。Richet (1861) ハ又兩側性兎脣ノ三代ニ亘リタル家系ニ於テ下顎骨ノ畸形ヲ伴ヘルヲ見タリト。Passavant (1862) モ兎脣及ビロ蓋披裂ノ同一家系ニ現ハレタルヲ報

告セリ。Sproule (1863) ハ其家系ニ於テ健康ナル女子ガ兎脣ヲ其子ニ遺傳セルヲ見タリ。Haymann (1903) ハ一家族ニ累代披裂症ノ發現セルヲ見、然モ本症ガ所謂 Generationsübersprung ヲナス事實ヲ認メ、且ツ遺傳性ハ母系ヨリ來ル事多シトセリ。而シテ本症及ビ手指、趾等ノ畸形モ Amniogenes, Trauma デハナクシテ内的因子ニヨル發育抑制作用ニ基ツクモノトセリ。Haug モ亦 Haymann ノ説ニ賛成セリ。Tichy (1920), Lonz (1928), Brophy (1924), Leven (1928), Frenzel (1936) 等モ亦同様ナル家系ト共ニ此説ニ賛セリ。Birkenfeld (1926) ハ披裂症ノ 20%ガ遺傳性ヲ有スルトナシ、Eicker (1930) ハ 32%, Löffing (1933) ハ 14%, Gebige (1933) ハ 34%ニ遺傳性ヲ認メタリト言フ。

本邦ニ於テモ神谷 (昭和 3 年)ハロ蓋披裂ヲ遺傳

性ト認ムルモ其範圍不明ニシテ、兎脣ハ優劣分離ノ不完全又ハ不確實ナルモノトセリ。貝波(昭和3年)ハ優性ナリトシ、松浦(昭和2年)ハ兎脣ノ遺傳行動不明ナリトセリ。又阿久根教授ハ同胞ニ口蓋披裂ノ來タレル例ヲ示セリ。茲ニ注目スベキハ Siemens(1923) ガ既ニ口蓋披裂ト兎脣トハ同一遺傳因子ニヨルモノニシテ 唯 Heterophäne Vererbung = 屬スルモノナリトセル點ナリ。斯カル家系ハ比較的多ク Raylay, Passavant, Haymann 等ノ家系、本邦ニ於テモ久保(猪)(1927) 氏等ノ家系アリ。

以上ノ如ク披裂症ノ遺傳性ハ一般ニ極メテ不規則ト言フベク、或家系ニ於テハ優性ニ、又或家系ニ於テハ明カニ劣性ニ現ハル、ガ如ク、外國例ニ於テモ最近迄ハ本病ノ遺傳ニツキ結論ヲ下セルモノナキ狀態ニシテ、本邦ニ於テモ、同様ニ川上(昭和7年)ハ本症ハ 殊ニ兎脣ハ劣性ニシテ其 10% ガ優性ニ轉換セルモノナリトシ、穴澤ハ又大部分劣性ナルモ、不規則優性ヲ示ス事モアリトシ、江西(昭和14年)ハ劣性ナリトセリ。之ヲ通覽スルニ、最近迄ニ於ケル披裂症ノ遺傳的研究ハ、兎脣、口蓋披裂等ヲ主トシテ取扱ヒ、或ハ其個々ニ就テノミ遺傳性ヲ云々シ、或ハ又兩者ヲ同一因子ニヨルトナスモ、其他ノ表型ノ存在性ニ就テハ殆ド之ニ注意セラレザリキ。本邦ニ於テモ、川上氏ハ兎脣ノミニ就キ其優劣性ヲ論ジ、江西氏モ亦家系中兎脣ノミヲ記載セルモノニ就キ、メンデル式單劣性ノ分離比ヲ求メテ兎脣ハ劣性ナリト斷ゼリ。然レドモ一方斯カル Spalbildung ヲ發生學の解剖學のニ觀ル時ハ、兎脣、口蓋披裂、或ハ懸壜垂披裂等ヲ夫々別個ニ調査シテ夫々ノ遺傳性ヲ云々スルハ危險ナル事明カニシテ 之等ヲ綜合的ニ調査

研究スベキモノナラン。

一體口蓋ハ第一鰓弓ノ上顎突起ヨリ生ズル口蓋突起ニヨリ形成セラル。口蓋突起ハ胎生第4ヶ月ニハ既ニ生ジ始メ矢狀位ニ後地平位ヲトリ兩側ノ口蓋突起ノ正中線間ニ裂隙ガ形成セラレ發生ガ進ムニツレ兩側ノ口蓋突起ハ接近シ合ヒ終ニ癒合シテ、胎生口蓋裂ヲ閉鎖スルニ至ル。同時ニ中鼻突起ヨリ形成セラレタル鼻中隔ガ沈下シ共ニ癒合シテ鼻腔及ビ口蓋ガ形成セラル。又上顎脣ハ第一鰓弓ノ上顎突起ト中鼻突起ヨリ生ズル人中トガ互ニ癒合シテ形成セラル。即チ癒合不完全ナル時ハ前者ハ口蓋披裂、後者ハ兎脣ヲ生ズルナリ。

1931 年 Schröder¹⁾ ハ家系調査ノ結果 20 % = 兎脣及ビ口蓋披裂ノ家族的發現ヲ示セルヲ見タリ。彼ハ其後、斯カル披裂症ニハ齒列異常、腦水腫、其他ノ頭蓋骨殊ニ顎骨ノ異常ヲ合併セル事ヲ認メタリ。殊ニ齒列異常ハ注目スベク、Schröder ハ之ヲ以テ Rudimentäre Manifestierung ト考ヘタリ。更ニ懸壜垂披裂ニモ注目セリ。1939 年 Mengele ハ其家系ニ於テ齒列異常、口蓋畸形、懸壜垂披裂ヲ合併セルヲ舉ゲタリ。而シテ是等ハスベテ發生期ニ於テ融合ガ完全ニ行ハレザル爲ニ生ズルモノニシテ 兎脣、口蓋披裂トハ密接ナル關係ニ在ルヲ說キ一括シテ Mikroformen ト命名シ、是ガ本症ノ遺傳學的研究上極メテ重要ナル地位ヲ占ムルモノナル事ヲ強調セリ。而シテ兎脣及ビ口蓋披裂ハ Hauptform ナリトセリ。

本邦ニ於テハ田中一弘氏(昭和8年)初メテ懸壜垂披裂症ノ遺傳性ニ就キ記述シ、本披裂症ハ明カニ遺傳スルモノアルヲ指摘セリ。而シテ年齡トノ關係ニ就キテハ、永井氏ハ本症ハ年齡ト

共ニ其發現率減少スルノ事實ヲ確メ然モ減少スルモノハ第一度ノモノニシテ、其原因ハ自然癒着ニヨルノ他、又磨滅スル等ノ機械的原因ニヨルトナセリ。又安田氏モ同様ナル現象ヲ認メタルモノハ僅少ナリト言ヘリ。

以上ノ如ク披裂症ノ遺傳問題ニ關シテハ其文献極メテ寥々タルモノニシテ、唯 Schröder 及ビ Mengele 等ハ稍々其中核ニ觸レタルノミニシテ、本邦ニ於テハ披裂症ノ綜合的觀察ヲ行ヒタル報告モナク、其家系モスカル觀點ニ於テナサレタルモノ皆無ト云フモ可ナリ。

余ノ調査セル家系ニ於テハ、兎唇、口蓋披裂及ビ懸壜垂披裂ノ三者ニ注目シテナサレタルモノニシテ、懸壜垂披裂ヲ加フル時ニハ明カニ優性遺傳ヲ示スヲ觀ル。齒列異常ヲ之ニ加フ可キカノ問題ハ、尙ホ今後ノ研究ニ待ツベキモノニシテ余ハ之ヲ除キテ考察セリ。更ニ上下顎骨ノ畸形及ビ「レ」線學的考察モ併セ行フベキ問題ナランモ、茲ニハ懸壜垂披裂症ヲ主トシテ考察セリ。

余ノ家系ニ於テモ、若シ懸壜垂披裂症ヲ除外シテ考フル時ハ口蓋披裂及ビ兎唇ハ孰レモ一見劣性ノ如ク發現セルヲ觀ル。林、江西、岩間、外山氏等ノ舉ゲタル家系ニ於テ觀ルト同様ナル家系トナルヲ知ル。然レ共若シ余ノ考フル如ク懸壜垂披裂症ヲ考慮ニ入ル、時ハ恐ラク余ノ家系ニ於ケルト同様ニ優性トシテ發現セルヲ知ルナラン。而シテ是等ノ披裂症ヲ一元的ニ考フル事ノ是非ニ就テハ Schröder Mengele 等ハ既ニ Mikroform トシテノ懸壜垂披裂ノ意義ノ重大性ヲ認メ、夫レヲ考フル時ニ披裂症ハ優性トシテ現ハル、ヲ提示セリ。既ニ述ベタル如ク、本邦ニ於テモ披裂症ノ遺傳的研究ハ、現在マデノ

報告ニ於テハ常ニ個々ノ披裂症、即チ兎唇ハ兎唇ノミニ着目シ、口蓋披裂ハ又夫レノミニ着眼シテ遺傳的研究ヲ行ヒタルモノ、ミナリ。川上氏等モスカル見地ノ上、兎唇ハ劣性遺傳ニシテ、僅ニ 10 %ガ優性ナリトセリ。

今余ノ家系ニ於テ懸壜垂披裂ヲ加ヘタル場合ニ就キ各家系ニ於ケル健康者：患者ノ比ヲ見レバ

K : G	トナリ 40.9% ガ患者トナル。此
5 : 3	値ハ家系内ニ於テ死亡セルタメ
7 : 3	實驗セザルモノハ健者トシテ計
6 : 2	算セルヲ以テ、更ニ多少ノ家系
4 : 2	ニ就キ實驗セル同胞ノミニ就キ
7 : 2	計算ヲ行フ時ハ、更ニ 50%ニ
3 : 2	近キ値ヲ示スモノナラン。然ル
4 : 1	時ハ本症ハ單優性ノ分離比ヲ示
5 : 2	ス事トナル。Schröder 等ノ言
6 : 2	フ齒列異常、顎骨異常等ヲ考フ
2 : 1	40.9%
4 : 2	ル時ハ恐ラク更ニ近キ値ヲ示ス
13 : 5	モノナラン。是等ノ更ニ精細ナル検討ハ余ノ行

ヘル如キ見地ニ立チテ更ニ多クノ家系の調査ヲ行ヒタル後ニナサルベキナラン。

茲ニ注意スベキハ羽佐田家系ニ於テ懸壜垂披裂ヲ見ザル者ノ子7名中3名ニ懸壜垂披裂ヲ見タル事實ニシテ、之ハ Schröder, Mengele 等ノ言フ如ク更ニ他ノ Mikroform ノ存在セルナルカ、又ハ所謂 Generationsübersprung ヲ示セルモノニシテ其遺傳ノ複雜性ヲ示スモノナリ。或ハ又永井氏ノ言フ如ク年齢ト共ニ自然癒着ヲナセルモノカ、或ハ磨滅ニヨリ消滅シ一見披裂症無キ如ク見エタルモノナルヤ知レズ。孰レニシテモ、披裂症ニ極メテ種々ノ程度ノ差アル事ハ本症ノ遺傳ガ複雑ナル要因ヲ以テ行ハルヲ示スモノナリ。

一方ニ於テ、懸壜垂披裂ノ程度ハ余ガ 3567 名ニ就キ行ヒタル統計ニヨリ見ルモ明カナル如ク、第一度ノモノ最モ多ク 5.4 %ヲ示ス。之ハ年齡ト共ニ漸減スルト言ヘル永井氏ノ說ヲ考フルモ、其甚シク多キヲ示シ、斯カル輕度ノモノガ本症ノ遺傳ニ關シテ重要性ヲ持ツ事ヲ示スモノナリ。而シテ余ノ統計ニ於テ懸壜垂披裂患者ガ極メテ多クシテ、兎脣、口蓋披裂ガ殆ド無キハ、調査材料ノ關係ニヨルハ既ニ述ベタル如クナルモ、披裂症中懸壜垂披裂ガ最モ多キヲ示スモノニシテ、之ヲ除外セル場合ニハ披裂症ノ遺傳研究ニ大ナル誤差ヲ生ズベシ。Birkenfeldハ懸壜垂披裂ヲ考慮セザル材料ニ就キ 80 %ガ劣性ニシテ、20 %ガ優性ナリトセリ。Sandersハ本症ニ 5 個ノ遺傳因子ヲ想定シ、然モ劣性ナリトセリ。即チ上脣ハ左右 2 個、硬口蓋モ左右 2 個、軟口蓋ハ 1 個トセリ。即チ Polymerie 說ヲ提唱セリ。Lenzハ又一方披裂症モ亦 Entwicklungs labile Anlage;ニヨツテ解釋サルベキヲ說ケリ。Justハ本症ノ遺傳ハ複對因子ニヨツテ支配サルハモノナリトシ、Schröderモ Justノ意見ニ贊セリ。

余ノ家系ニ於テモ、兎脣、口蓋披裂及ビ懸壜垂披裂ガ同一家系内ニ夫々發現シ、所謂 Intra-familiäre Variabilitätヲ示スヲ見ル。更ニ又、同ジク口蓋披裂、懸壜垂披裂又ハ兎脣ニシテモ、夫等ノ程度ニ種々差異ノ認メラルハ、單ニ余ノ調査セル家系ニ於テノミナラズ、多クノ報告ニ於テ明カナル事實ニシテ、之等ハ其一部ハ外的環境ニヨル事アラシモ、又一方遺傳因子ノ内的環境即チ Nebengene 等ニヨツテ生ゼル Expressivitätノ差トシテ理解サルベキモノト思ハル。

本症ニ他ノ畸形ヲ伴フトノ報告ハ又多クシテ Rischbieth, Birkenfeld, Sanders, Übermuth, Häntzschel 等ハ四肢ニ於ケル多指症、矩指症、脊椎披裂、頭蓋畸形、耳畸形、「ヘルニヤ」等々ノ畸形ヲ伴フ事アルヲ說ケリ。殊ニ Schröder, Mengele 等ハ頭蓋及ビ上顎骨畸形ノ齒列畸形等ハ本症ノ Mikroformトシテ重要視スベキヲ述ベタリ。是等ノ事實ハ又、畸形ノ外的原因ニヨル發生說ニモ一論據トナリ得ルモノナルモ、之ヲ以テ披裂症ノ總テガ外因ノミニヨリテ發生スルトハ考ヘ難ク、殊ニ家系調査ヲ詳細ニ行フ程其遺傳性ヲ認メザルヲ得ズ。而シテ披裂症モ亦他ノ遺傳性疾患ト同ジク、外的環境ト共ニ内的環境ニヨツテ其遺傳因子ガ種々ノ程度及ビ發現率ヲ以テ發現スルモノナリ。而シテ斯カル遺傳性ノ他ノ畸形ヲ伴フ事ハ又本症ガ單純ナル遺傳因子ニヨツテ遺傳セラルハモノトノ考ヘニ疑ヲ懷カシムルモノナルモ、本症ガ Monomerieニヨルカ、Polymerieニヨルカ、或ハ Multiple Allelieニヨルカニ就テハ、披裂症其物が既ニ餘リニモ種々ナル程度ノ差ヲ示ス事、及ビ狼咽ヲ中心トシテ一方ハ懸壜垂披裂、一方ハ口脣ニ於ケル癍痕線トヲ考ヘル時之等ノ間ニ一元的ナ關係ノ存スル事、及ビ輕度ナル懸壜垂披裂ガ多キ事等ヨリシテモ、本症ヲ單一ナル遺傳因子ニヨルト考フルヨリモ、數個ノ遺傳因子ガ之ニ關係スルト考フル事ガ妥當ナリト思ハル。而シテ一方此事ハ Polymerieトシテモ量的因子ニヨツテ其 Phenotypusガ量的、累積的ニ發現スルニ非ズヤト思ハル。而シテ各 Genotypeusニ於テ Hauptgenトシテ働クモノ及ビ其他ノ Nebengene 等ノ因子環境ニヨリテ種々ナル程度ノ披裂症ヲ發現スルニ非ズヤ。又一方 Quantiti-

tative Gene ニシテモ、必ズシモ優性ノ表現
ガ不完全ナモノ許リトハ限ラズ、中ニハ一見
優性ガ完全ニ現ハル、事モアリ得ル事ハ既ニ實
驗遺傳學ニ於テ明カニサレタル所ニシテ、披裂
症ノ遺傳ヲ Polymerie ト考フル事ハ其發現ノ
不規則性ヲ説明スルニモ合理的ナル如ク思ハ
ル。Sanders ハ5個ノ因子ニヨルモノナラン
ト提唱セルモ未ダ確定シ得ズ。一方余ノ家系ニ
於テ、全披裂症患者ヲ統計セルニ、メンデル式
單優性ノ分離比ニ極メテ近似セル値ヲ示ス可能
性アルヲ知リタルハ前述セル如シ。之ハ調査材

結

余ハ口蓋披裂及ビ兔唇ノ家系ヲ調査シ、懸壜
垂披裂症ガ其家族ニ多ク發見サル、ヲ知リタ
リ。即チ兔唇、口蓋披裂及ビ懸壜垂披裂ハ共ニ
同一家系内ニテ遺傳セラル、モノニシテ、是等
ヲ一括シテ披裂症トシテ遺傳性ヲ考察スル時
ハ、明カニ優性遺傳ヲ示スモノニシテ、懸壜垂

料稍々少キ感アルモ、本症ノ遺傳因子群ガ同一
染色體ニ存スル事ヲ示ス一論據トモナリ得ルモ
ノナリ。縱ツテ同一染色體ニ存スル遺傳因子ガ
披裂症ニ關シテ數量的關係ヲ保持スルト看做ス
事が出來ル。即チ Multiple Allelie ニヨツテ遺
傳スルト考フルガ最モ合理的ナル様考ヘラル。
Just 及ビ Schröder モ斯カル考ヘニテ、彼等
ノ稱スル Mikroform ヲ遺傳學的ニ解釋セント
シテ、更ニ今後多クノ家系調査ヲ必要トスル點
ヲ力説セリ。

論

披裂ハ殊ニ其遺傳ニ重要ナルモノニシテ所謂
“Mikroform”ト看做ス可キナリ。而シテ披裂
症ノ遺傳ハ恐ラクハ Multiple Allelie ニヨルモ
ノニシテ、之ガ決定ニハ尙ホ多クノ家系調査ガ
斯カル觀點ニ立ツテ行ハル、ヲ要スルナラン。

参 考 文 献

1) *Handbuch der Erbbiologie des Menschen*: Gunther Just Bd. 2, S. 561-580. 2) *Denker u. Kahler*: *Handbuch der Hals-Nasen-Ohrenheilkunde* Bd. 1. 3) *Schröder, C. H.*: Die Vererbung der Hasenscharten u. Gaumenspalte Arch. Rassenbiol. Bd. 25, S. 369-394 (1931). 4) *Mengele, J.*: Sippenuntersuchungen bei Lippen-Kiefer-Gaumenspalte. Zeit. Mensch. Vererbungslehre. Bd. 23, S. 17-42 (1939). 5) *Lenz, F.*: Ein Stammbaum über Nasenscharten u. Gaumenspalte Arch. Rassenbiol. Bd. 25, S. 220-222 (1931). 6) *v. Verschuër*: Über das Zusammentreffen von Lippen-Kiefer-Gaumenspalte mit Missbildung der Gliedmassen. Deutsch. mediz. Wochenschrift. (1941) Nr. 10, S. 277. 7) *F. Keibel u. F. P. Mall*: *Handbuch der Entwicklungsgeschichte des Menschen*. 8) *久保猪之吉*: 日本耳鼻咽喉科全書. 第

1卷, S. 645-770. 9) *江西甚良*: 兔唇ノ遺傳學的
研究. 齒科月報. 第19卷, 第9號, S. 476-478. 10)
穴澤順一: 兔唇及ビ口蓋披裂ノ遺傳. 民族衛生.
第7卷, S. 275. 11) *外山龜太郎*: 人間ノ三ツロ
性ノ遺傳. 日衛生會誌. 5-3-4, S. 275 (1909).
12) *阿久根睦*: 兄弟ニ來タル口蓋披裂症例. 大
日耳鼻. 第42卷, 第7號, S. 1046. 13) *岩間義夫*:
著明ナル兔唇遺傳ノ1例. 日本外科寶函. 3-6, S.
1152. 14) *井上通夫*: 口蓋形成ノ成因及ビ片側
口蓋披裂ノ本態ニ就テ. 日齒界. 第98號. 15) *原
田雄吉*: アイヌ人及ビ北海道函館市兒童ニ行ヒタ
ル懸壜垂披裂症ニ就テノ統計的觀察. 耳喉. 第4卷,
S. 58. 16) *永井穎一*: 學齡兒童ノ懸壜垂披裂ニ
關スル知見. 耳喉. 第5卷, S. 631. 17) *安田鐵次
郎*: 懸壜垂披裂ノ形態學的研究. 日病理會誌. 第
21卷, S. 350. 18) *小泉貞介*: 懸壜垂披裂ノ統
計的觀察. 耳喉. 第9卷, S. 1070. 19) *川上理一*:
優生學ト遺傳病學. (昭7). 20) *田中喜喜*: 遺傳學.

(本論文ノ要旨ハ大日本耳鼻咽喉科會名古屋地方會第72回例會ニ於テ演説セリ)

撰筆スルニ臨ミ恩師阿久根睦教授ノ御指導御校閱ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表ス。

(原稿到着ニ昭和16・11・3)

—急 載—